

第6回 文化遺産国際協力コンソーシアム研究会 報告書

遺跡の情報発信と 地域への還元

ーパブリック・アーケオロジーからみる国際協力ー



第6回 文化遺産国際協力コンソーシアム研究会報告書

遺跡の情報発信と地域への還元

ーパブリック・アーケオロジーからみる国際協力ー

日時：2010年3月17日(水) 14:00 - 18:00

場所：東京文化財研究所 会議室

文化遺産国際協力コンソーシアム

序文

学問としての考古学が成立してから 100 年余り、常に変化を続ける社会のなかで、考古学は専門家のためだけの閉ざされた学問から開かれたものへと変わりつつあります。少数に限られてきた考古学への関心は既に一般市民の関心領域となり、考古学者は自分たちの活動する社会的文脈を意識する必要にせまられています。考古学者が直接的専門を越え、考古学教育、遺跡の公開、遺跡保護制度、観光などについて議論する場を提供してきたパブリック・アーケオロジーは、過去に対して多元的アプローチを試みるものとして展開してきました。

一方で、多くの考古学者は、その活動の場を海外へと広げています。こうした海外における考古学調査は、単に現地における貴重な文化遺産の発見に貢献するだけでなく、人類史の解明に努めてきました。また、現地との共同研究の枠組みで考古学調査を行うことにより、積極的に考古学分野における協力相手国の人材育成にも貢献してきた事例もあります。このように考古学者による海外での調査活動は、現在の文化遺産国際協力のなかで重要な意味を持ちつつあるのが現状です。

文化遺産国際協力コンソーシアムは、「遺跡の情報発信と地域への還元—パブリック・アーケオロジーからみる国際協力—」として、いくつかの事例から考古学と国家・世界との関係を考察しつつ、パブリック・アーケオロジーの様々な要素のひとつとして文化遺産国際協力をとらえることで、考古学調査の成果をどのように現地地域社会へ還元するのかについて検討する研究会を 2010 年 3 月 17 日に開催しました。研究会では、基調講演者として英国の University College London (UCL) の考古学研究所から、パブリック・アーケオロジーの第一人者であるティム・シャドラホール教授をお迎えしました。事例報告としては、日本の大学院で考古学を学びながらペルーで発掘調査を実施しているサウセド・セガミ氏から、日本の諸大学が長く調査研究を行っているペルーの考古学についてご報告いただきました。また、カンボジアのアンコール遺跡群に位置するバンテアイ・クデイ寺院において長く発掘を行っている丸井雅子氏からは、日本人の立場から、カンボジアの考古遺跡が発掘されることはパブリック・アーケオロジーの視点からどのように捉えるのか、事例を踏まえつつ、ご報告いただきました。

本報告書は、それら講演・報告の内容をまとめたものです。

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

目次

序文

目次

1. 基調講演

- 「パブリック・アーケオロジー ―その考察領域および 21 世紀における発展―」 8
ティム・シャドラホール

2. 報告 1

- 「ペルーにおけるパブリック・アーケオロジー ―日本人考古学者の影響―」 18
ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ

3. 報告 2

- 「カンボジアにおける考古発掘調査と地域への還元」 26
丸井雅子



基調講演

パブリック・アーケオロジー

—その考察領域および 21 世紀における発展—

Public Archaeology-Defining, Promoting and Developing Public Archaeology

ティム・シャドラホール
(ロンドン大学)

Prof.Tim Schadla-Hall (University College London)

パブリック・アーケオロジー ―その考察領域および 21 世紀における発展―

Public Archaeology-Defining, Promoting and Developing Public Archaeology

ティム・シャドラホール (ロンドン大学)
Prof. Tim Schadla-Hall (University College London)

ご紹介ありがとうございます。本日こういう場にお招きいただいたことをたいへん光栄に思います。まず、たいへん残念なのは、お恥ずかしい話ですが、私は日本語をお話しすることが出来ません。本来ならばこの場で話す予定だった松田陽氏は、私より英語が上手ですし、イタリア人よりイタリア語を話せますし、なにより彼の日本語は完璧です。その彼が来られなくなったことはとても残念です。それから、何故かどこにいても私の発言により不快になる方がいらっしゃるようで、これはたぶん私が未開のヨークシャー人の血筋だからだと思いますが、もしそのような失礼がありましたらご容赦ください。

まず、イギリスの大学でパブリック・アーケオロジーがどのように広がったかをお話すると約束していました。最初に印刷物においてパブリック・アーケオロジーという言葉を使ったのは、マックギムジー (McGimsey) という優秀なアメリカの教授です。彼は 1972 年の著書の中で、アメリカにおいて考古学のための法整備や保護の概念をより広めるために、この言葉を用いました。彼は、過去の遺産を守るためには何をすべきか、一般の人々を啓蒙することの重要性を語りました。そして、そういう場合には、考古学者こそが、人々を先導すべきであると考えました。

さらに、ロンドン大学考古学研究所のピーター・アコ (Peter Ucko) について触れたいと思います。彼は、1986 年の世界考古学会議の場において、パブリック・アーケオロジーという言葉を用いた、最初の人物です。アコが意図していたことは、考古学という学問を誰もが参加できるものにすること、そして考古学者に彼らの研究テーマが偏狭なものであって、学問的ではあっても社会的でないということを理解させることでした。彼は、パブリック・アーケオロジーによって、過去に対する異なる見方、過去の異なる利用の仕方、そして過去に対する政治的に異なる立場などが存在するということを認識させるべきだと考えていました。その結果、私たちの研究所では、全ての学部生は、穴を掘るだとか研究に専念するといった狭い領域に引きこもらないで、考古学のもつ重要性を学ぶ講義やコースをとることを義務付けられています。

同時に、アコはパブリック・アーケオロジーの新しい修士課程の設置に尽力しました。この修士課程は設置から 10 年経ちますが順調に運営されています。世界中の学生を受け入れ、また同様に多くの博士課程の学生も在籍しております。それから、私が最近編集者を務めていますパブリック・アーケオロジーに関する国際雑誌についても触れなければなりません。私たちは特に東アジアの同業の方々がこの雑誌に投稿してくれるのを心待ちにしております。もし機会がありましたら、日本考古学の世界的にみて先駆的な活動である「現説」(現地説明会)についてのちょっとした記事が書かれることを期待しています。私たちヨーロッパの同僚の多くは、「現説」が学生たちにとって、早い段階で考古学とは何であるか、地元の人々にとってどういう意味があるのかについて説明することを学べる場である、ということに気づいていません。もし、どなたか興味のある方がいらっしゃれば、この講義の後で、パブリック・アーケオロジーに関する文献の紹介リストと最近の論文で日本語訳されたものをご紹介しますと思います。

ところで私は考古学者です。全人類が自身や他者の過去について関心をもっていると信じて疑いません。人々が過去を失えば、彼らは過去を創作するでしょう。創られた過去は、全くばかげたものであるかもしれないし、完全な作り話かもしれませぬ。そして、事実または真実となることもよくあります。例えば、イギ

リスのキルトやタータンはスコットランド人のためにイングランド人によって考案されたものであるにも関わらず、スコットランド人はこれらはスコットランド固有のものだと主張しています。つまりパブリック・アーケオロジーズが関わる領域とは、現実には経済から政治分野まであらゆる分野なのです。重要な点は、パブリック・アーケオロジーズは解釈において自由であるということです。そこで、今日は(過去の解釈という)問題を提起したいと思います。過去のいくらかについては何も分からないか、過去の大部分については政治に関連する事柄であるか、過去の多くについてはお金をもうけることであるか、あなたなどの解釈を選びますか。こうした問題においてどのくらい考古学者が責任をもつのでしょうか。考古学者とは、データを収集し、科学的な説明をする存在であると考えられています。しかし、誰が考古学者以外に過去について重大な関係をもちうるのでしょうか。考古学とは、単に過去を発掘、記録、分析するだけのものではないし、遺物を分類したり同定したりするだけのものでもないのです。

考古学調査の結果は、社会、国家、政治家といった自分達の目的に考古学を利用する人々にとって興味深いものです。それは中立のものではありません。政治的な範疇に関わらない多くの分野がありますが、私はまずこの分野から話しを始めたいと思います。イギリスでは、どこにおいても、私たちにとって都合の良い過去を作り出せるように過去を利用します。私たちの国では、外国からの移民を恐れる保守的な政治家がいます。彼らは、イングランドはドイツからやってきたアングロ・サクソン人のアイデンティティをもっている主張していました。考古学的には、かつてアングロ・サクソン人の侵入があったという証拠はないのです。毛沢東が生きた時代の中国では、考古学者は、拡大していくすばらしい時代を享受しました。また、私は手短かに、月の輪古墳の発掘についても話をしたいと思います。

毛沢東(図1)が1970年代に考古学の活用について述べた文章を、ここに2つ引用しました(図2)。2つめの引用文は次のように言っています。「文化大革命の間に行われた(考古学的)発見は、人類が世界を創造する歴史的なプロセスにおける事実を数多く明らかにしている。(中略)封建的な王朝の支配下では、物質的な富を享受したのは皇族であり、労働者ではなかった。封建的な王朝の時代に記された歴史は、当然のことながら、歴史を作り出すのは多くの人民であるという事実を反転させた」。私は、これが正しいのかどうかについて個人的な見解をもっていませんが、これは政治家が常に過去を利用する方法を示す好例だと思います。それゆえ、もう1つの「古為今用」(昔のものを現代に役立てる)という言葉が、非常に興味深いのです。今日の中国において、主に考古学が貢献しているのは、主に観光と経済に対してだと思います。しかしながら、八達嶺長城には、長城を参拝しにきた世界のリーダーの写真をテーマとした博物館展示があり

Mao Zedong 1873-1976

Wrote several philosophical and political works and recognised the power of the past-his belief that the Chinese people should "make the past serve the present" was used to interpret the material excavated from the Han tombs at Mancheng and other discoveries made during the Cultural Revolution. But in keeping with the view of one China, he also used the practice and results of archaeology for nationalist purposes



図 1.

Archaeology, nationalism and politics

"past ages demonstrate that the unification of China represents an irresistible current and all splitters trying to go counter to it are bound to fail" (New Archaeological Finds in China, Peking 1978)

(archaeological) "discoveries made during the Great Proletarian Cultural Revolution reveal more facts in the historical process of mankind creating the world, the working people creating social wealth. ...Under the rule of the feudal dynasties it was the imperial family and not the working people, who enjoyed the material wealth. History written during the feudal dynasties naturally reversed the truth that it is the masses of the people who create history." (New Archaeological Finds in China, Peking 1974)

図 2.

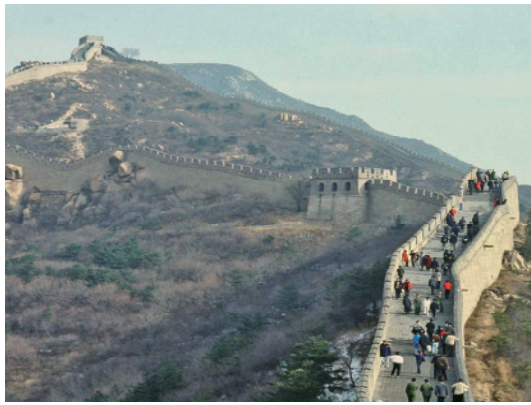


図 3.



図 4.

ます (図 3、図 4)。ニクソン元大統領のような有名人の写真もあります。

さて、日本について話しますと、私は 1953 年に地元の人々の手によってなされた月の輪古墳の発掘とその記録映画には、深く感銘を受けました。その映画には、地元の過去に対する興味と自分達の過去を守るという地元の人々の姿が映っていました。過去を見つめる地元の人々とともに働く考古学者の姿もありました。しかし、市民参加を生み出すという点において考古学者を巻き込むのは良いことだったという、彼ら考古学者の背後にさえ政治的な偏好がありました。地元の人々は訓練され、過去に関して関心を持つようになりました。しかし発掘に関して言えば、私には政治的な意図があったように思われるのです。

次に経済とパブリック・アーケオロジーとの関係について一例を挙げたいと思います。高句麗は、ご存知のように中国と朝鮮の国境に出現した王朝ですが、中国は高句麗は元来中華帝国下の辺境のひとつであると主張しました。なぜならば、高句麗の一部が現在の国境にあるからです。2004 年に中国と韓国の双方で高句麗の起源について大きな論争が起り、外交問題にまで発展しました。その結果、現代韓国のルーツとしての高句麗という考え方は、勢いを失っていきました。これはアイデンティティ、経済、そして考古学的な解釈が関係していることを示す一例です。

政治的な変化が解釈に影響を与える場合もあります。これはケープタウンの近くにあるセシル・ローズによって建てられた南アフリカの征服を記念したモニュメントです (図 5)。続く 1950 年代からのアパルトヘイト政策を行う体制下では、南アフリカの過去に対する解釈も変化しました。これは南アフリカの文化歴史博物館で、1996 年まではオランダ人やボーア人の考古遺物や文化財で溢れていました (図 6)。南アフリカの先住民族である黒人は、文化的に遅れた集団とされ、博物館の展示の中では小さく扱われていました。1997 年以降、ネルソン・マンデラの釈放も伴い、博物館は変わりました。展示室に掲示されていた説明文も変えられました。この文は、政体が変わるとき、私たちがどのように過去を変えるのか手がかりを与えて



図 5.



図 6.

くれます。言葉が上手に選ばれていて、またそつがありません。「この博物館のテーマと展示室は、もっと私たちの歴史を反映させるために、まとまった身近な方法で改装中です」。それからこれは特に好きな言葉ですが、「展示品の中には一時的に私たちの脈略にないものに見えるものがあるかもしれませんがご理解ください」。

つまり私たちが何者であるかを決めるのは考古学の問題ではありますが、経済的に重要でもあるのです。ヨービック・バイキング・センターは、今日、ヨーク市でもっとも経済的に規模の大きな雇用主です。これは考古学発掘による成果ですが、観光目的のために使われていました。これといった事業計画はありませんでしたが、年間100万人もの観光客が訪れます。このセンターはまったくの偶然ですが、うまく機能してきました。私はひどいところだと思いますが、仕事とお金を生み出しています。バイキングのキットカットやバイキングの複製土器も買うことができます。バイキング・コーヒーといったものまで買えます。もちろん、バイキングがはるか遠くに航海していたにしろ、南アメリカには到達しなかったことは知っています。このセンターは馬鹿にはできません。なぜなら過去を売り物にするというのは、おそらく過去から学んだり理解したりする行為よりも多くの人々にとって重要だからです。

1998年に、ある美しい像がクロアチアのある島で発見されました。ここは人口の少ない小さな島で飛行場也没有。海から400km内陸にあるザグレブの国立考古学博物館とその考古学者たちは、この像を管理できるザグレブで保管すべきであると考えました。一方、その小さな島の住民たちは、この像が観光客をよび、ひいては飛行場建設にもつながるものと期待して、島への返却を望みました。私は島の住民たちの側にいます。私は、私のことなど気にもしない国立考古学博物館の館長に言いました。「おそらくこの像は難破船かまたはギリシアからイタリアの旅の途中の船にあったもので、元の場所に返すとしたら、この像の製作地であるギリシアに返却するのがいいのかもしれないですね」と。館長はにこりともしませんでした。

次にマルタ島に話題を移したいと思います。マルタを取り上げるのは、マルタ人が観光について詳細に記録していて、何よりマルタのGDPの25%以上を占めているのが観光による収入だからです。マルタ人は観光客が歴史や文化の断片と呼ぶものに興味を持っていることを知っています。この表は、各国で考古学や博物館が占める割合を示したものです(図7)。これをみると、イギリス人の観光客が一番歴史や文化に興味がないといえます。歴史や文化に関連する分野の総体は、マルタではGDPの5%を占めるにすぎません。マルタで一番有名な考古遺跡に、新石器時代の神殿群があります。これらは世界最古の神殿です。人々がこれらの神殿を訪れるのには様々な理由があるでしょう。太陽信仰に興味がある、または女性偶像に興味があるという人がいるかもしれません。まあ、たぶんいないとは思いますが。いずれにせよ、人々はお金ももた

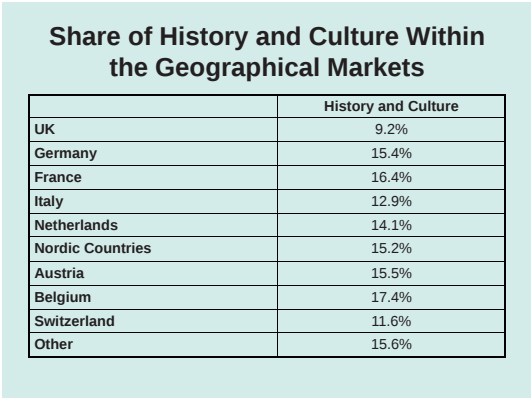


図 7.

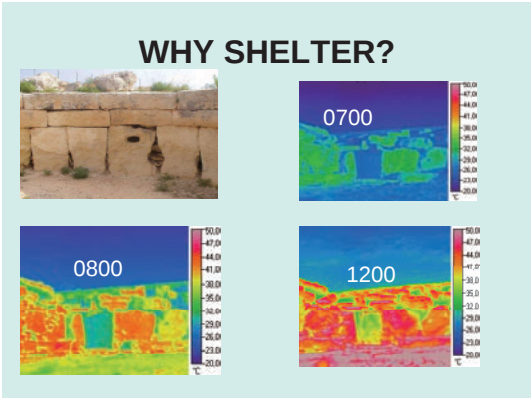


図 8.

らします。神殿自体は、風化の脅威にさらされています。高い気温と観光客にさらされているのです。考古学者たちは、神殿を保護する覆屋を建設したいと思っています。

彼らの主張は、神殿群を保護しなければ、将来無くなってしまい観光客をよぶことができなくなるからというものです。覆屋建設に最も強く反対しているのは、地元の人々、有権者であり、彼らは覆屋によって見た目が損なわれ、観光客が来なくなることを心配しているのです。このスライドは、神殿全体で5時間後に温度の上昇が見られたことを示していて(図8)、これがまさに神殿群が保護されなければならない理由です。私の同僚と教え子であるルーベン・グリマ(Reuben Grima)は、マルタがEUに加盟した際にEUから900万ユーロ拠出するように政府に働きかけました。賢い建築家や設計者の協力のもと考古学者主導で4年間にわたって丁寧な計画が行われ、完璧な結果が得られました。保存修復の問題は、しばしば誤解されます。なぜならば保存修復家は対象物を変化させたことや処置を施したことの理由を説明しないからです。保存修復家は、自分たちは正しい処置を行ったのだから人々は理解してくれるだろうと考えています。でも正しいことをすることは、ときに闘いのはじまりになるのです。

それでは、イスラエルのシナイ半島にある聖カタリナ修道院の話をしてしましょう。この修道院には世界でも極めてまれな初期キリスト教に関する文書が収蔵されています。ここは初期キリスト教の活動拠点でもあったのです。例えば、修道院の近くでイエスは悪魔に誘惑されたと考えられています。毎年、数百、数千もの人々が、聖カタリナ修道院の周辺へ巡礼に訪れます。なぜ人々はそこへ行くのでしょうか。食べ物がほしいからでしょうか。それともなんらかの理解を得たいからでしょうか。それとも記念品がほしいからでしょうか。それから誰がこうした観光客や巡礼者から利益を得るのでしょうか。利益を得るのは、地元の人々や修道僧ではありません。考古学者でもありません。保存修復家でもありません。歴史家でもありません。どういう理由で人々がそこに行くのであれ、実際のところ得しているのは、観光業者や旅行会社といった人々なのです。この事例によって、考古学者が外の世界を見ようとしなければ、考古学が得することはないということを確認にしたいと思います。

なぜ人々は遺跡を訪れ、また考古学的な科学を理解しようとするのでしょうか。ショッピングの代用なのでしょうか。それとも霊的な目的でしょうか。私にはわかりません。しかしここで一例をあげますが、私は最近イギリスの新石器時代の石室墓で、墓の中央部に礼拝所を持つドルイドたち、あるいはヒッピーと呼ばれるグループを見つけました。人々の多くは、私が真実だと思うことと無関係な理由で考古遺跡を訪れます。これはヘンジ・ショップで、エイブベリーというイギリスのストーン・ヘンジにあります(図9)。遺跡自体は5000年前のものです。この店で売られているのはばかげた本ばかりで、ドルイド、魔女、または宇宙人



図 9.



図 10.

のための本です。

これらはなぜ人々が考古学を利用するのかを示す事例です。他方、復元を通して人々に過去について説明しようとする場合にも問題が起きます。特に、その復元に金持ち、政治家、建築家が関与する場合によくみられます。日本でもほかの国々でも同じような問題は起きているはずです。これはイギリスにおける初期の復元の事例で、ウェールズの「赤い城」です(図10)。中世の城を19世紀に復元したものです。しかし考古学発掘によると、この復元は完全に間違っています。ウェールズ人はこのような城を12世紀に建造することはできなかったはずです。「赤い城」は明らかに中世より後の時代の施設を備えて復元されています。今日ここを訪れる人は、「赤い城」は復元された姿の通りだったと信じて疑わないでしょう。

さて、最後の例になるとと思いますが、アイルランドのニューグレンジについて見てみましょう。それは新石器時代のヨーロッパ三大墳墓です。莫大な金がこれらの遺跡の修復に投じられました。幸運にもまだ手つかずの墓もあります。この背後にある原動力は、観光客を促すという経済的なものです。その計画は経済に大きな影響を与えました。これはニューグレンジの完全に修復された墳墓です(図11)。公衆トイレの正面のように見えます。新石器時代には決してこんな外見ではありませんでした。こちらはノウスの近くの紀元前3000年の墳墓群です。それらは1997年に復元されました(図12)。訪問者のために新石器時代の小道を備えていますが、莫大な費用をかけて、完全に間違って復元されました。わたしたちはそれについて心配するべきです。

ここに見えるのが再建中の中心的な墳墓です(図13)。新石器時代の線刻を救うために特別な色がついています。これは、間違った理由によって行われた危険な保存です。しかし、我が国のすぐれた遺跡であるストーンヘンジさえも、大部分は再建されていることを忘れてはいけません。違っているのは、イギリス人は



図 11.



図 12.



図 13.

より巧妙だからです。ストーンヘンジはイギリスでもっとも訪れる人の多い考古遺跡で、1年間に80万人が訪れます。また、心にとどめておいてほしいのは、それは、利益をあげる少数の遺跡のうちのひとつだということです。またその管理はひどいものです。それはよい例ではありません。イングリッシュ・ヘリテージがやっていることをまねしてはいけません。なぜなら、私はあなた方のほうがうまくやるだろうと確信しているからです。しかし、わたしたちは、過去についての人々の判断を常に誤らせています。一例を挙げます。1485年にボズワースの戦いが行われた場所は、リチャード3世が殺され、ヘンリー・チューダーが王になった場所です。しかし、2001年、地元当局はここで1645年のイングランド内戦を再現することを決めました。イングランド内戦を中世の一騎打ちやアメリカ式の吹奏楽と混同しています。私たちは、故意に人々を混乱させることのないように努力する責任があると思います。

次に、我が国には考古学に関するテレビ番組がたいへん多いという事実について手短かに話したいと思います。私の意見では、これらの番組のうち考古学者としてたいへん良いと思うのはごく少数です。その番組は遺物を隠された宝物のように扱います。しかし、周知のとおり、考古学それ自体は、正直に言って、とても、とても退屈なものです。番組はおもしろくなくてはなりません。私たちは自らをメディアに結び付けるべきであり、その逆にならないようにすべきです。しかし、番組に興味深いものにするために、私たち考古学者が関心を持っていることに、ほとんどの人は関心を持たないことを認めなければなりません。私の学生の数人は、テレビ局とともに仕事をする中で、テレビ番組をうまく変えようと働きかけています。

もう一度話題を変えて、ユニークなイギリスの計画、すなわち遺物データベース (Portable Antiquities Scheme) についてお話ししたいと思います。お時間があれば、ウェブサイトをご覧ください (<http://www.finds.org.uk>)。この計画は1999年に、市民や金属を探知もしくは宝探しをする人々が考古学的な発見を報告することを促進するために開始されました。多くの考古学者は、イギリスでは、金属探知機の使用を法律で禁止すべきだと考えていました。もともと、私は、金属を探知する人々の腕を切断することに同意する官僚的な考古学者の一人でした。しかし、その後、物が盗まれたり密輸されたりするよりも報告され記録されることを保証するほうが良いと説得されました。最終目標は考古学者のために50の仕事を追加することです。これまで記録されていなかった50万点以上が、新たに記録されました。

この計画には、とくに金属探知をする人には、依然問題がありますが、犯罪の要素を排除し、市民とこの計画の重要性について同意することに重点をおかなければなりません。それは徐々に進んでいます。私にとって大事なことは、ウェブサイトへのアクセスを分析すれば分かることですが、ウェブサイトが過去を記録し理解しようとする一般的興味を拡大しているということです。この計画は今も世界で唯一のものであり、イギリスに典型的な妥協を示しています。しかしウェブサイトをご覧になって、これが不法な略奪を阻止するための方法であるかどうか、自ら判断してください。

では、パブリック・アーケオロジーについて、世界中で働いている考古学者の責任について話を戻しましょう。特別な方法で特別な時間に物を見るように人々を説得することができる考古学者がいます。月の輪古墳で近藤義郎教授(当時・岡山大学助手)には市民参加の発掘を推し進めたい特別な「信念」があっただろうと、私は謙虚に思います。私は彼が正しかったと思います。一方で、ヒットラー率いるドイツのために働き、征服と破壊を正当化するために考古学を使ったヤンクーン (Jankuhn) のような著名な人物もいます。私は彼が間違っていたと思います。かつて日本においても縄文時代とのつながりは、今日縄文時代を見る方法とは違っていました。私は微妙な話題をしていることに気づいています。イタリアでは今日でも南北の間に分

裂があります。北部のイタリア人は北部同盟とともに、自らはケルト人であると信じています。政治家はそう信じています。彼らは南部をからかい、遅れていると主張しています。本当の理由は、南部が北部よりも貧しく、政治家は分裂させるために過去を使おうとしているからだと推測します。

今日は、なぜ私がパブリック・アーケオロジーがテーマとして重要であると考えるか、なぜそれが国際的な規模を持つのか、なぜ文化遺産国際協力コンソーシアムが非常に重要なことをしていると信じているか、を説明しようと試みました。仕事において私がやろうとしていることは、考古学者に、政治家とともに働くように、また観光業者のような経済的に動機づけられている人々とともに働くように、そして建築家や設計者といった社会の他の分野の人々とともに働くように説得することです。建築家は間違った思い込みをする、保存修復家は間違った思い込みをする、旅行業者は間違った思い込みをする、政治家は間違った思い込みをする、と考古学者は不平を言いました。しかし、考古学者がこれらの人々を理解し、ともに働くことが必要だと私たちは考えています。

最後に、パブリック・アーケオロジーの2つの見方についてお話しして、結論としたいと思います。私の教え子である松田陽氏からもらったこのスライドを使います。日本人である彼はパワーポイントが、私よりも得意です。松田氏と私の研究は他の人々の研究と同様に、私たちパブリック・アーケオロジストが過去を理解するためにとる基本的なアプローチが2つあることを示しています(図14)。

ひとつは、普及啓発アプローチです。私たち専門家は、過去について結論を出したことを人々に伝えます。私たちの2番目の目標は、多義的アプローチです。人によって過去の見方がいかに違うかを見ることです。普及啓発アプローチは、考古学的な技術、分類、変形、組成、段階分け、分布といった研究成果の集合に依拠しています。それは考古学者がやることであり、考古学者以外の人には、たいていとても退屈です。多義的アプローチは考古学者の他、地元の人々、政治家、土地所有者、土地管理者、観光客、より広い市民を含みますが、それぞれが過去について異なった見方をしているのです。

この2つのアプローチの特徴を示せば、普及啓発アプローチは、権威主義的であると言えます(図15)。これは非民主的です。一方で多義的アプローチは、相対主義的であり、とても、とても非学術的です。両者の中間のどこかに3つ目の方法があります。私はこれをイギリス人として言っています。なぜなら私たちはいつも中間にいるからです。しかし、私たちは人々があらぬことを言うのを許さない方法を見つける必要があります。しかし、私たちは、議論の余地があると言う必要があります。これが今日のパブリック・アーケオロジーの現実の課題です。ご静聴ありがとうございました。

Two approaches to public archaeology

1. Outreach approach

aims to communicate information
gained from archaeological studies
to the public in the most effective way

2. Multivocal approach

aims to explore various archaeological
interpretations made by different
individuals and groups of the public

図 14.

Two approaches to public archaeology

1. Outreach approach

Authoritarian! Undemocratic!

2. Multivocal approach

Relativistic! Unscientific!



図 15.

報告 1

ペルーにおけるパブリック・アーケオロジー —日本人考古学者の影響—

Public Archaeology in Peru : The influence from Japanese Archaeologists

ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ
(総合研究大学院大学 / 日本学術振興会特別研究員)

Saucedo - Segami, Daniel D.
(Graduate University for Advanced Studies / JSPS Research Fellow)

ペルーにおけるパブリック・アーケオロジー ―日本人考古学者の影響―
Public Archaeology in Peru : The influence from Japanese Archaeologists

ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ (総合研究大学院大学 / 日本学術振興会特別研究員)
Saucedo - Segami, Daniel D. (Graduate University for Advanced Studies / JSPS Research Fellow)

こんにちは。最初に、英語でご報告することをお詫びいたします。日本語も話すのですが、一週間前に現地調査から帰ってきたばかりですので、英語の方が話しやすくなっているのです。質問は日本語でも英語でもどちらでもかまいません。

今日の発表では、まず、ペルーにおける日本人考古学者の仕事をご紹介したいと思います。考古学という学問はペルーでは新しいものではありません。ペルーにおいて考古学は、ひとつの学問分野として成立して、既に100年以上経っています。しかし、パブリック・アーケオロジー、すなわち、考古学の現場を一般の人々に公開することに関しては、ペルー人考古学者と外国人考古学者が一般に目を向け始めてからたった25年しか経っていません。このような努力は、第一に考古遺跡の保護、第二に観光や経済活動によって地元の人々の生活の質を向上する必要に応じてなされるものです。もちろん、パブリック・アーケオロジーというこの考え方をペルーにおいて発展させてきたのは、ペルー人考古学者でした。しかし、地元の人々の生活の質を向上させようとしている外国人考古学者もいらっしゃいます。興味深いのは、一般に考古遺跡を公開するということに、より多くの援助を行っているのは、日本人考古学者だということです。そこで、この発表では、この活動について手短に紹介し、ペルー人考古学者の一人として、私の意見を述べたいと思います。

はじめに、ペルーについて少し説明したいと思います。ペルーは南アメリカの太平洋岸に位置します。人口はおよそ2,300万人です。言語としてはスペイン語が広く使われていますが、その他にケチュア語とアイマラ語という原住民の言語もあります。主な宗教はカトリックです。ペルーの地理について言えば、ペルーは異なった多様な気候と地勢を持つとても大きな国です。基本的には、海岸地域、アンデス山脈、アマゾンの熱帯雨林の3つの地域が認められます。それらを細かくすると、全域は8つの異なった地理学的地域に分けられます。

このような地理学的地域差は、ペルーに住む人々、とくに砂漠に近い環境にある海岸地域の住む人々に影響を与えています。首都リマを含む主要な都市がこの地域にあります。このような環境的特徴は、ペルーの過去の社会にも影響を与えました。たとえば、アンデス山脈は異なった地理学的特徴を有し、生活するのがきわめて難しい地域です。アマゾン源流部の熱帯雨林地帯も、生活するのが不可能であるか、もしくはたいへん難しいでしょう。このような環境的、地理学的特徴の驚異的な地域差が、ペルーの歴史全体に影響を与えました。

ペルーには、紀元前3000年にさかのぼることができる考古遺跡または寺院があります。それらは、大きなピラミッド群として発見されています。例えば、大きなピラミッド群の一つである、ペルーの北海岸のモチカの巨大ピラミッド群、そして、もちろん、ペルーの最大の観光ポイントであり、たいへん有名なマチュピチュがあります(図1)。このようにペルーには多くの考古遺跡があります。実際にはそれらのすべてを保護することは不可能です。スペイン征服前の文化だけでなく、スペインの文化を含む過去もあります。より興味深いのは、このスペイン征服が現在の人々に影響を与えたことです。そのため、スペイン征服前の宗教と、その後に導入されたカトリック信仰との間には違いがあります。

つまり、ペルーは、異なったアイデンティティーを持つ一つの国です。これらのアイデンティティーのほとんどは、先史時代の過去とは切り離されていました。古代の寺院や古代の墓地といった考古学遺跡を例として示しますが、それらの多くは月の表面のように見えます(図2)。これは、略奪行為がこの国では本当に長い歴史を持つからです。略奪行為さえ、ペルーでは大きな問題ではありません。新興国であるペルーは市や町を地方に拡大しています。この写真に一例を見るように、道が古代の寺院である墳丘をほぼ切り取っています(図3)。同じ遺跡の上には、整然と、家畜小屋が並んでいるのが見えます(図4)。

考古学者にとって本当に難しいのは、人々が自らの過去をより経済的な方法で活用している場合に、過去について考えてもらおうとすることです。たとえば、私がほかの考古学者と一緒にこの遺跡に行った時、私たちはこの登



図 1.



図 2.



図 3.



図 4.



図 5.



図 6.

録された場所の所有者に「なぜあなたは遺跡を壊してしまうのですか？」とたずねたところ、彼はとても単純な2つの答えを返しました。一つは「私はそれが考古遺跡であるとは知らなかった」、もう一つは「鶏は高い場所にいなければならない。低い場所は鶏には暑すぎるから」という答えでした。このように、考古学遺跡は、鶏を飼育するための単なる場所よりもずっと良いものでありうることを理解してもらうのが、私たち考古学者にとっては、本当に難しいのです。

このような状況にも関わらず、多くのペルー人考古学者は様々な方法で一般に近づくよう努力しています。このため、考古学者は政治に入っていく必要があります。たとえば、ある町では、地元の考古学者は、市周辺に大きな公園を造るため、市の規約に対処しなければならませんでした。もちろんその公園の目的は、観光を通じた経済的貢献です。考古学者は同様に、自らの町の博物館を通して一般の人々に近づくようとしています。たとえば、考古学による発掘と遺物を説明するための遺構展示館がまちなかにあります(図5)。依然、我々は自問自答しています。「これは機能するのか、しないのか？」

別の遺跡では、観光開発が、町の経済を助けています。たとえば、観光客へのお土産品に、地元の人々は古代の技術や古代の図像を使い始めました。考古学者は、地元の人々が、古い織物を作る古代の技術を使って、新たな経済的な収入を得るのを助けることもしています(図6)。しかし、すでに述べたとおり、これは機能するのか、しないのか。たとえばマチュピチュのような遺跡と観光開発の共存はたいへん難しい問題です。

このように政治的にも、経済的にも難しい問題を抱えるなか、2つの日本隊がこの地域で活動しています。一つは、東京大学による古代アンデス文明調査団で、ペルーで50年以上調査研究をおこなっています。特に大貫良夫先生によって実施されたクントウル・ワシについて後ほどお話しします。もうひとつは、シカン考古学プロジェクト(Sicán Archaeological Project)です。日本生まれですが、教育の大部分をアメリカで受けた島田泉先生が指揮をとっています。このふたつの考古学者グループによる、一般の人々に対するふたつの違ったアプローチをみていきましょう。

まず、最初の古代アンデス文明調査団について手短にお話しします。ペルーの中央北部の山地において1988年から1989年まで、クントウル・ワシという墓が発掘されました。これはその遺跡の写真です(図7)。丘の下には現代の村が広がっています。写真は関雄二先生と加藤泰建先生が発掘しているところです(図8)。関先生は、この発表で使用する写真を多く貸してくださいました。先生は、私の博士論文の指導者でもあります。この場をかりて御礼申し上げます。

活動は日本人考古学者だけで行われたのではなく、ペルー人考古学者も参加しています。そして、村の人々もいろいろな方法で参加しています。たとえば、男性は作業員として発掘に参加しましたし、女性は発掘された土器洗いを手伝いました。この点において、考古学プロジェクトは村の経済に直接貢献したといえます。しかし、最も強

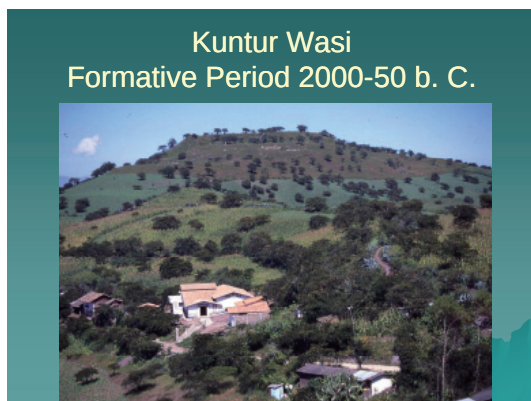


図 7.

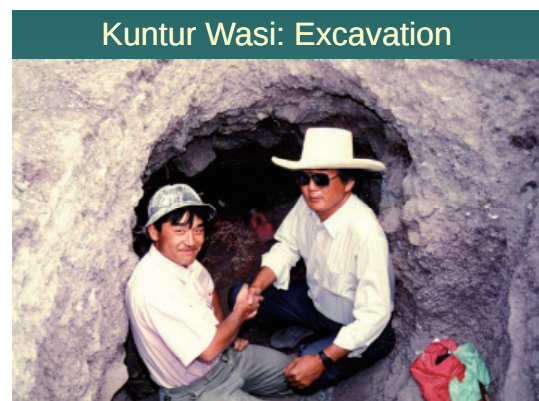


図 8.



図 9.



図 10.

い影響はある墓が発見された後におこりました。墓から、金製品や美しい土器が他の遺物とともに発見されたのです。そして、これら発見された貴重な遺物をどうするか、という大きな問題が生まれました(図9)。

大貫良夫先生が既に多くの論文で書いているとおり、そこで博物館を建設するという案が話し合われました。よくあることですが、残念ながらここで地元の人々がイニシアティブをとることはありませんでした。人々は遺物に対してなにか貢献しようとしたのですが、彼らはどのようにしたらいいのかという教育を受ける機会がありませんでした。たとえば、彼らのほとんどは、博物館が何かも知りませんでした。日本人考古学者たちは、博物館がどのようなものになるか、アイデアを与えると同時に、彼らは一歩退いて、地元の人々自ら博物館を運営させようと試みました。みなさんの多くがご存知のとおり、博物館を建てる資金を集めるため、日本で展覧会が行われました(図10)。結果、博物館は地元の人々によって、運営され、清掃され、またしばしば遺跡自体の修復も地元の人々によって行なわれるようになりました(図11)。この事例では、日本の調査団は、直接のインターフェースというよりもアドバイザーとして支援をおこなったといえます。

さて、この最初の例は、小さな地域の、小さな村で地元の人々と活動をしている考古学者についてでした。次に発表する例は、考古学者が地元の人々とともに、より広い地域を対象に活動する事例です。

シカン考古学プロジェクトは、ポマ森林歴史保護地区において展開しています(図12)。プロジェクトの成果は、フェレナフェ(Ferrenafe)の隣町にあるシカン国立博物館に収められています(図13)。ポマ森林は、自然保護区であり、「アドベ(Adobe)」といわれる日干し煉瓦で造られたピラミッドが数多くあります。ここでは、供物である金製品や他の製品が多数出土した墓2基が発見されています。これら貴重な出土遺物は、シカン国立博物館建設へのきっかけとなりました。この博物館と、後にチャビ



図 11.



図 12.



図 13.



図 14.

ン・デ・ワントル (Chavín de Huántar) 遺跡で建てられた博物館が、日本政府の支援によって建設されています。また、考古学者が、森そのものを保護するために地元の人々と作業をしている事例もあります。

これまでに示した博物館の例では、地元の行政当局と一緒に働いています。興味深いのは、遺跡公園や博物館が、考古学者からのいくつかの案をもとに、地元の人々により計画されているということです。同時に地元の人々は、いくつかの説明に手を加え工夫し始めました。例えば、ある人は主要な墓の中で発見された供物を用いて講義をし、また古い言語で歌を歌っており、それらは博物館の

中でおこなわれています。考古学者は、彼がやっていることに実質的な価値はまったくないと、考えています。

同時に、地元の考古学者は博物館の中で、高校や小学校の教師とともに働いています。彼らは、考古学プロジェクトで得られた成果について地元の町で発表をしています。このような地元との交流によって、地元の人々は、考古学プロジェクトで働いています。たとえば、ここにいる男性は、実際のガイドです(図 14)。彼は 1982 年に考古学プロジェクトに参加しました。彼の兄弟 6 名は、全員考古学者であり、また森林ガイドでもあります。彼らと、まちの他の人々は、プロジェクトの資金を得るために、NGO と共同で活動しています

しかし、この地域においてすべてがうまくいっているわけではありません。この地域は農業活動が盛んな地域です。博物館が建設された 2001 年には、この地域に他のまちの人々が移住してきて、ほぼ 1400 ヘクタールの森を破壊しました。その中にはいくつかの考古学的な墳丘も含まれていました。シカン国立博物館の館長が何人かの政治家と運動をして、彼らをこの地域から退去させる措置を取ることができたのは、2009 年 1 月のことでした。悲しいことに、この抗争で 2 人の警察官が亡くなりました。この地域は現在、NGO からの支援によって、ふたたび植林されています。この出来事は、私たちに「我々は本当に正しいことをしているのか？」という質問を投げかけます。この質問は、私から会場の方々にも考えていただきたい質問でもあります。

さて、このプロジェクトは、当初きわめて学術的な考古学プロジェクトでしたが、結果的に地元の考古学者とのネットワーク構築がおこなわれました。博物館で働いている、またはこの地域で働いている考古学者はすべて、島田泉先生によるこのプロジェクトに参加しました。島田先生の影響は考古学プロジェクトを越えて地域におよんでいるといえると思います。

これら 2 つのプロジェクトの特徴を見て、なぜプロジェクト実施者がこの地域でこれほど多くの影響を与えたか、その理由として私が考えたことを示したいと思います。これらふたつの事例は決して「どのように地元の人々とはたらくのか」という例ではありませんが、地元の人々を理解する助けにはなったと思います。第一に、これらプロジェクトは長期間かつ継続的プロジェクトでした。プロジェクト実施者には、地元の人々のことを、彼らがどのように考え、どのように組織するかを理解するのに時間も、彼らとの良好なネットワークを構築する時間も十分ありました。彼ら外国人考古学者は、植民地するかのように働くわけでもなく、遺跡周辺のペルー人考古学者と地域社会とともに働く国際的な考古学者でした。プロジェクト中、その成果は日本とペルー両国において公開されるように努められていました。このような情

報の提供は、ペルーにおいて地元や地域的なアイデンティティーを生み出す助けとなりました。日本では、(ペルーの) 地元の人々が必要とするものを建築するために、経済的・資金的な支援を集めることに成功しました。そこには、地元の共同体の機関を理解し、彼らがどのように組織するのかを尊重することが根底にありました。博物館のような施設の建築はきわめて有益でしたが、私は常に行われるべき支援であるとは思いません。この点において、クントウル・ワシのプロジェクトは地元の人々の意見と共に博物館を建てるという大変良いアイデアだったと思っています。一方で、シカン国立博物館は小さなまちの大きな博物館ですが、現在でもいくつかの問題を持っています。たとえば、照明や水の費用はとても小さな町にとって、きわめて高額です。しかし、依然として地元の考古学者はこの博物館をできるだけ活用しようと努力しています。

日本人考古学者にとって将来はどうなるでしょう？もちろん日本人考古学者はペルーで調査研究をおこなっていくでしょう。私の意見では、重要なことは、方法論を進展させる学術的なスコープを生み出すことです。つまり、彼らが発掘しているときに遺物を見せ説明するという考えは、地元の人々にとって本当に役に立つことでした。私は修士課程のときに日本で発掘を行いました。その時たいへん興味深いと思ったのは、地元の人々とコミュニケーションをとる方法について、学生が教えられていることでした。もうひとつ、文化的資源の管理とパブリック・アーケオロジーに関する情報を日本がペルー人考古学者と共有することは、きわめて有用であると思います。ペルーでは、ペルー人考古学者は必ずしも英語など他の言語を読んだり理解したりすることができません。もちろん彼らにとって日本語の情報を理解するのはたいへん困難です。ですから、ペルーで活動している日本人考古学者は、日本からペルーに届く情報の一種の拠点となっていただけだと思います。文化的資源の管理とパブリック・アーケオロジーに関するだけでなく、日本人が持っている発掘の方法論もペルー人考古学者にはたいへん有用であるだろうと私は思います。同時に地元の考古学者や地元の人々によるイニシアチヴを促進することも、この地域ではたいへん有用です。日本人考古学者は共同研究をおこなう科学者などの実践的で良好なネットワークを保持しています。日本人考古学者らは、地元の考古学者や人々に、地元から世界へ出ていくように呼びかけることができます。ご清聴ありがとうございました。

報告 2

カンボジアにおける 考古発掘調査と地域への還元

丸井 雅子
(上智大学)

カンボジアにおける考古発掘調査と地域への還元

丸井 雅子 (上智大学)

よろしくお願いいたします。私は日本語で報告させていただきます。ご紹介いただいた、上智大学の丸井です。本日最初にシャドラホールさん、そしてセガミさんのご講演を聞き自分がこれから話をさせていただく上で、考えがまとまってきました。私の報告は非常に具体的なカンボジアでの事例で、何を私はやっているのかという、材料を準備してきたのですが、むしろその後の質疑応答やディスカッションの時間に、シャドラホールさん、セガミさんから、私のカンボジアの例は実はパブリック・アーケオロジーの考え方に照らし合わせると、こういった風にまとめることができるのではないか、というように、もし概念化できるのであれば、ご教示いただきたいと思います。では始めさせていただきます。

カンボジアの特別な事情につきましては、本日お手元にお配りしている講演資料の冒頭の部分で非常に急いで歴史を振り返りましたので、そちらをご覧くださいませ。ここで申し上げておきたいのは、私が考古学者として活動しているカンボジアのアンコール遺跡は 1992 年に世界遺産に登録されました。私がこれから具体的にお話するバンテアイ・クデイという遺跡も、その世界遺産に登録された遺跡公園の中にございます。よって、すでに遺跡公園として、世界遺産として保存すべき対象の中に組み込まれていますので、今現在は一応盗掘等の心配はしなくていいというところです。

簡単に私が所属しているチームについてお話しますと、上智大学のアンコール遺跡国際調査団というチームの中で考古学の調査を担当しております。この調査団の団長は、石澤良昭というカンボジア史の専門の先生です。1991 年からバンテアイ・クデイでは考古学の発掘調査を行っております。この写真はバンテアイ・クデイの東側正面のものです。12 世紀末ごろに当時ジャヤバルマン 7 世という王がこの寺院を建立したと言われておりまして、遺跡に残る色々なレリーフ等から、仏教寺院ではないかと考えられております(図 1)。こちらで 91 年から発掘調査をしています。繰り返しになりますが、92 年にアンコール遺跡は世界遺産に登録されました。内戦を経て混乱状態にあったカンボジアですが、94 年にアプサラ機構というカンボジア政府のアンコール地域遺跡保護整備機構ができて、以降、このアプサラ機構がアンコール遺跡の整備保存のあらゆる事柄を管轄しております。そして我々外国のチームは、例えば考古学の発掘調査をアンコールで行いたい場合にはアプサラ機構に申請して許可をいただくことになっております。

今日はパブリック・アーケオロジーという大きなテーマの中で、私が考古発掘調査を通じて地元とどのよう

に関わってきたのかという事例を報告いたしますが、アンコール遺跡がどういった意味をもっているのか、アンコール遺跡とは何なのか。世界遺産として登録されて以降、やはり強調される特徴、性格というのは、まず内戦によって疲弊したカンボジアという国を建て直す、国家復興の旗印として振られてきた。それから、繰り返しになりますが、92 年に登録された世界遺産であり、カンボジアではこのアンコールが第一号の世界遺産です。世界遺産として登録された遺跡、文化資源として観光産業の大きな目玉ともなっています。一方で、アンコール遺



図 1.

跡の周辺には、当然、今も人々が住む集落が点在しているわけですが、日本では一般に遺跡というと、地域の歴史を語るいわば郷土史の資源、材料であると思いますけれども、カンボジアではこういった側面にはなかなか光が当てられていない、あまり注目されていないような気がいたします。これは私の印象なんですけれども、アンコール遺跡の側面として強調される部分三つ(内戦以降の国家復興の旗印として、1992年の世界遺産登録として、観光資源として)、それからあまり注目されていない郷土史としてのアンコール、これを最初にお伝えしておきたいと思います。

今日の報告の目的ですが、具体的な事例をご紹介しますのですが、まず最初に私が考古学者として、外国人、日本人である私がカンボジアに出向いて発掘調査を行う、もしかしたら言葉の表現の仕方だけの違いで、考え方というか根っここの部分は同じかもしれないのですが、あまり私自身は国際協力ということを考えたことはありません。むしろ私自身が考古学者としてアンコール遺跡に興味をもって、そこで発掘調査をしたい、そしてそういう機会をカンボジアに与えてもらっている、その中で考古学の調査の成果がどういふうに地域に還元できるのか。これはカンボジアであっても、ペルーであっても同じだと思いますが、私は地域の郷土史再発掘のための発掘調査を目指したい。私がやっている調査が先史時代の遺跡ではないということもありますけれども、人類史を解明するといった大きな目的ではなく、地域史の材料を提示していきたい。これが私の主たる目的です。そして、そういった調査で得られた成果をいかに地域と共有して、遺跡と地域が共生していく考え方を提示できるか。考古学の発掘調査をどうやったら地元の人に理解してもらえるのか、こういったことへの取り組みをこれから具体的にお話していきます。

この辺もまた一般的な考え方になりますので、簡単にお話ししますが、考古学と現代社会がどのように接しているか(図2)。まず、専門家、考古学者、研究調査の対象となる遺跡、そしてアンコール遺跡の場合はすぐそばに人々が住む村、集落、ローカル・コミュニティが存在しているわけです。考古学者は遺跡で調査をし、その成果、何がそこで行われているのか、どんなことが明らかになったのかをやはり地域の人に知らせる義務がございます。情報公開、成果公表、この部分になります。これを実際に行う具体的な方法として、現地説明会、「現説」がございます。日本では、この「現説」は一般的といいますか、特にあらためてご説明するまでもないと思いますが、カンボジアでは現地説明会というのは、おそらく一般的ではなく、92年に世界遺産に登録されて以降、まずは専門家同士でお互いの現場でどういうことが行われているのかを知る必要がある、情報交換する必要があるということで、アンコール遺跡で活動する国際機関、各国政府の人たちが、お互いの現場を見学して意見を交換する、といった現場見学会は頻繁に行われておりました。ところが、地元の人に対してカンボジア語で、一般の人向けに説明するというものは、多分長い間企画されてこなかったと思います。そういったことを現場でやろうじゃないか、カンボジアの人、特に遺跡の近く住む人たちに対してカンボジア語で、分かりやすい言葉で遺跡の発掘調査を紹介する、それをわれわれのバンテアイ・クデイを始めよう、そういった声がわれわれのチームの中から起りました。私たちのチームですけれども、日本からくる考古学の専門家私以外のメンバーは、奈良や大阪、京都といった関西の先生が多いです。特に、奈良、大阪では日本の



図2.

中でも早い段階から現地説明会が行われていたと伺っております。チームの中で、バンテアイ・クデイ、カンボジアの遺跡で、これからどうやって地元の人たちと遺跡の保存や整備を考えていくか、を考えるにあたって、やはりカンボジアでも日本で行われているような「現説」を実施しようということになりました。

我々は片言のカンボジア語しかできません。発掘調査は幸いなことに一人ではできませんで、大勢の仲間が必要ですが、私たちは91年からプノンペンにありますが王立芸術大学の考古学部と建築学部の学生の学生実習も兼ねて、発掘調査をしております(図3)。ここでもう一度、考古学と現代社会の接点というところで、先ほどの一般的な概念図として、アーケオロジスト、「専門家」を入れましたが、このバンテアイ・クデイの場合では当然、この「専門家」というのはカンボジア人の専門家(図4)。ところが、内戦を経たカンボジアでは中堅の考古学者がいない状態でした。そこで、私たち、大学で実際に今、考古学、建築学を学んでいる学生たちに、実習で学んだこと、バンテアイ・クデイの歴史全般などなどを自分たち自身でおさらいしてもらい、それを地域の人たちに分かりやすく情報公開するという現地説明会を提案し、必ず実習期間の最後に「現説」をするとしてまいりました。

これまでに実施した説明会をまとめますと、1999年に初めてバンテアイ・クデイで現地説明会を実施しました。その後、発掘調査の折りに適宜行ったのですが、2000年から2001年にかけて、われわれのバンテアイ・クデイの発掘現場から大量の石でできた仏像が出土いたしました。ちょっと先に次のスライドに行きますが、これが仏像が出土した時の調査の様態です(図5)。このように、大量の石の仏像が土の中から発掘されたわけですが、「これはもう、地元の人たちにぜひ見ていただかなきゃいけない」と私たち、喜色ばみまして、急いでアプサラ機構、それから遺跡保護警察に、「現地説明会を行いたい。近くの村の人を招待したい。」と計画を話しに行きました。ところが、仏像発掘現場の現地説明会を企画しましたが、アプサラ機構、遺跡保護警察からは「それは絶対に許可できない」というふうに言われました。なぜかといいますと、今こういった石の仏像を発掘している、出土しているということを何の知識もない、あるいは文化財などに理解のない村の人たちに見せた場合、バンテアイ・クデイあるいは他の遺跡で盗掘が起こるかもしれない、あるいはバンテアイ・クデイが盗賊に襲われるかもしれない。もし、そういった事態が生じた場合、どうやって責任をとるのか、と言われたのです。こういった仏像の出土が大量にあるということは珍しく、また一個一個の骨とう品としての価値も高い。で、盗掘があるに違いないと言われました。我々日本人として、良かれと思って企画して意気込んで現地説明会をずっと行ってきたのですが、カンボジア政府、警察から、頭からガツンと殴られて、「あなたたちのやってきたことは、このカンボジアの状況を全然理解してい



図 3.



図 4.

なかったのだよ」と言われたような気がして、非常にショックを受けました。結局この仏像発掘現場の現地説明会が延期されて以来、私自身も、一緒に働いていたカンボジア人のスタッフたちも、なんとなく、こう気分が萎えてしまって、しばらくの間、現地説明会は実施していませんでした。

その間、大量に出た仏像をどうしたのかといいますと、カンボジア政府、アプサラ機構でもまだ当時は、これを保管するきちんとした収蔵庫がございませんで、もしこれをカンボジア側に渡すのであれば、屋外、あるいは屋根があるところでも複数の倉庫に分散されて保管と言われました。我々は、それは避けたいと思っておりました。先ほどペルーの例で、市民運動が盛り上がり地域にミュージアムができたと同って、それから、日本で展覧会をやったときの寄付など、そこまでエネルギーが動いたのは本当にすごいなと思って、心から敬服申し上げます。我々の場合は、日本の企業からかなりまとまった寄付をいただき、こういった専用の博物館が、遺跡に近いシェムリアップの町の中に建設されまして、2007年11月に完成いたしました(図6)。先ほどのバンテアイ・クデイからは、最終的に270数点の仏像が出土しましたが、この博物館に収納されて展示されることになりました。

こういった展示作業が行われたのですが、2008年1月3日に正式に開館しましたが、来館者がほとんどいませんでした。来るとしても、日本の観光客。何よりも我々が残念だったのは、正式開館する前の2007年11月に、わざわざプノンペンから王様もいらして完成記念式典が行われたのですが、その時、地元の人が3000人近く動員されて、王様を迎えるために建物の外で旗を振っていたのです。ところが、王様が帰られた後、地元の人たちは解散。中に入ることはできませんでした。これが非常にもったいなかった。2008年2月に改めて、カンボジアの村の人を招待した見学会を企画しました。この、これまではバンテアイ・クデイの発掘現場だけの見学だったのですが、発掘現場、それから実際にものが展示されている博物館、そして最後に修復事業が終わったばかりのアンコール・ワットの西参道の3か所をまわる見学会を実施しました。この時に、約160人の村の人たちが来てくれたのです。感想を聞きましたら、バンテアイ・クデイのすぐそばに住む50歳代のある男性は、2000年から2001年にかけて発掘していたときには、そういう発掘があるというのは聞いていたけれども、発掘現場は見せてもらえないし、何が行われているか分からなくて、その後に仏像がどこへ行ったのかも分からずじまいだったが、何年も経って今日ここで仏像を見ることができてほっとした、と言ってくれたのです。非常に嬉しかったです。一方、ある70代の男性は、せっかく休みの日の午前中、呼ばれたから来たけれど、仏像ばかりだ、と(博物館はいまこのバンテアイ・クデイの出土品だけなので、本当に仏像だけなんです)。仏像は寺でも見られるのに、なぜ今日連れてこられた

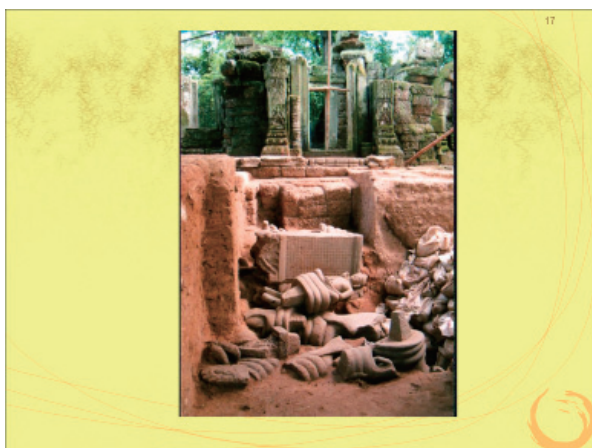


図 5.



図 6.

のかわからない、と言われました。どちらも非常に率直なご意見で、そういうのを直にきけるのがやはり現地説明会の醍醐味かなと我々は反省しつつ感じたわけです。

年に一回ずつですが、現場と博物館を周る会を企画しましたが、昨年、もっと来た人に体験してもらうの
がいいのではないか、それから、大人を休みの日に現地説明会につれてくるのはどうかという意見がありま
した。まず、呼ぶ人たちというのが、町の人ではなくて、農村の人たちで、我々は村長さんをお願いして声
をかけてもらうのですが、仕事はやっていないのかもしれない、でもせつかくの休みの日に何時間も潰して
我々のところに来てもらう、それはどうなのだろうという意見がカンボジア人スタッフの間からもでました。
そこで、昨年の第三回目は小学生に絞って、現地説明会に招待しました。これは、第一回目の時の写真です
(図7)。そして、これが三回目の子どもたちになにか体験してもらおうと、その体験の内容の企画を練って
いるところで、最終的にはここにありますように展示されている仏像を下絵とした塗り絵をやってもらうこ
とにしました(図8)。準備にあたっては、この時期に現場実習に来ていたプノンペンの考古学と建築学の学
生たちがリハーサルを何回か繰り返して、それからこちらの写真で真中にいる人たちは遺跡でお土産売り
をしている若い子たちに、リハーサルといいますか、我々の説明を聞いて分かりにくいところがないか聞いて
もらっているところです(図9)。

これが当日の様子ですが(図10)、私たち日本人はカンボジアの人にとって外国人ですし、また村の人た
ちにとっても、見慣れた顔とはいえ、やはり感覚的に遠い存在じゃないかなと思うんですね。この現地説明
会で実際に説明するスタッフ、学生たちも、同じカンボジア人ではあるけれども、プノンペンの首都からや
ってきた、また考古学を勉強している専門家の卵と、小学生という、そういう意識の隔たりもある。カンボ
ジア人の学生は子どもに対する現地説明会をするまで、そここのところには気がついていない。リハーサルを繰
り返すうちに、そういったことに気がついていく。専門的なことを易しい言葉で噛み砕いて説明する、とい
うのは当たり前のことですが、そういうことにだんだん気が付いていく。で、当日を迎えて、現場の説明、
塗り絵をする(図11)。

この現地説明会には約100人の小学生が来てくれましたけれども、これは私たちのチーム、アプサラ機構、
シェムリアップ州教育局の協力を得て、三者で共同で実施いたしました。

三番目に、ちょっと急いでお話しますが、ただの現地説明会という用語弊がありますが、考古学者から一
般の人たちへ一方向で情報を流すものが多いんじゃないかと思うんですね。それで、三回目の昨年、子ども



図7.



図8.

を招待したときは、上手くいったのかどうか分からないのですが、体験してもらうということで塗り絵をしてもらいました。で、実は以前に現地説明会をずっとやっていたときに、やはり一方向の解説だけでは物足りない不満である、実際に地域に住む人たちが、バンテアイ・クデイならバンテアイ・クデイを実際の生活のなかでどのように認識しているのか、あるいはおじいさんおばあさんたちから、バンテアイ・クデイについてどんな話を聞いているのか私たちも知りたい。それで、遺跡の保存等に役立つヒントを得られるのではないか、そういった希望をもって、口頭伝承、民話の採集調査を実施しました(図12)。民話一般ではなく、遺跡あるいは歴史に関係する民話の調査をいたしまして、最終的には二つの民話の絵本を作成しました。カンボジア語でまとめて、カンボジアの絵描きさんに絵をつけてもらって。今日、うっかりして絵本を持ってくるのを忘れてしまいました。A4サイズ、横長のカラーで、遺跡にまつわるお話をいくつかまとめています。これは、カンボジアの小学生たちに、ある団体の支援を受けて、無料で配布されました。

それで、もうひとつ言い忘れてしまったので、博物館の話に戻らせていただきます。さきほどは、日本の企業の支援を受けて、我々のバンテアイ・クデイ専用の博物館ができたというお話をしました。もうひとつ、アンコール遺跡では初めての事例であったタニという焼き物の窯跡の発掘調査が、1995年から行われていました。その、焼き物の窯跡にサイト・ミュージアムが昨年の2009年12月に完成しました。本日会場におみえの西村康先生が奈良文化財研究所にいらしたときに非常にご尽力されたタニという窯跡の調査で



図 9.



図 10.



図 11.



図 12.

すが、アンコール時代の焼き物を焼いていた窯で、カンボジアではそれまでアンコール・ワットのように地上に残る石造記念物に対する興味関心が非常に強く、いわゆる埋蔵文化財は顧みられていなかったんですね。また、その重要性に対しての理解を得ることが非常に難しかった。そういった場所ではありますが、長い間の調査を経て、昨年、ユネスコの信託基金によってサイト・ミュージアムが完成いたしました。そちらでも長い間、特にアプサラが頑張っていて、地元の人への埋蔵文化財への理解の運動などやっております、現在はほぼ盗掘がないと伺っております。

最後になりますが、こちらのスライドをご覧ください(図13)。冒頭で、世界遺産アンコールには多様な側面があると申しあげまして、グローバルな側面、国家レベル、地域レベル。グローバルな面では、人類にとって普遍的な価値のある文化遺産、また各国の政府機関による遺跡修復保存の華やかな舞台ともなっている気がいたします。我々のチームも、アンコール・ワットの西参道という表舞台でずっと修復作業をしていました。決してそういったものを批判するものではございません。そして、観光産業が大きく動いている。私が考古学者として目指すのは最初に申し上げたように、地域、このバンテアイ・クデイという寺院は、私たちにとっては遺跡ではあるのですが、地元の人にとってはまだ毎日お参りする信仰の対象でもあるのです。そういった「生きている寺院」であることを尊重しながら、発掘調査の機会を得たので、発掘して出てきたもの、明らかになったものを地域の歴史資料として還元できるのか、地元の人に知ってもらいたいのは観光産業の舞台であるとか、外国人の観光客がいつばいくるといふ、もちろんこれも重要な生活の一部ですけれども、自分たちの地域の歴史の一コマであることを分かってもらいたい。でも、もちろん地元の人たちがここから経済的な効果を得ることを否定するものでも、阻害するものでも全くありません。地域の歴史の一つである考古遺跡というものを知った上で、自分たちに経済的な効果をもたらす一つの資源と考えてくれば、それはそれでいいんじゃないかと思っております。

最後ですが、今日の私の話は国際協力という面には言及いたしませんでした。それは、私自身が国際協力という言葉をなんとなく恥ずかしいというか、使うのに抵抗があるというのものもあるんです。むしろ、自分自身がカンボジアの歴史・遺跡に興味をもって、その一つ的手段として考古学を選んでカンボジアで活動している、そこからどうやって地域とつながりを持てるのかという、非常に小さいレベルでの話なんです、しかしそういった視点からでも、実際の考古活動、地域とつながりを持つような「現説」というものが実施できるという事例報告をさせていただきました。私の話は以上です。ありがとうございました。



図13.

第6回 文化遺産国際協力コンソーシアム研究会
遺跡の情報発信と地域への還元
ーパブリック・アーケオロジーからみる国際協力ー

報告書

2011年3月 発行

編集・発行 文化遺産国際協力コンソーシアム

独立行政法人 国立文化財機構 東京文化財研究所
110-8713 東京都台東区上野公園 13-43
TEL 03-3823-4841 URL <http://www.jcic-heritage.jp/>